

した気魄と不拔の勇気があった、と語られている。

本書は医学史の研究書として書かれたものではなく、「ロマン的に、情緒的に」書かれた医学外史である。そして著者がとりあげた先人たちの逞しい意志と激しい情熱がたっぷり出ずドラマは、読者の心に何かを語りかけているようである。科学ジャーナリストの少ないわが国に、このような読みやすい医学物語が次々と刊行されることを熱望する次第である。

(津田 進三)

〔致知出版社・〒150-0001東京都渋谷区神宮前六―1―211―18、  
☎〇三(三四〇九)五六三二、平成九年六月発行、A5判、  
三二八頁、本体価格一五〇〇円〕

日本眼科学会百周年記念誌編纂委員会編

### 『日本眼科学会百周年記念誌』全七巻

日本眼科学会は、明治三十年第一回の学術総集会を開催した。平成八年に第百回の学術総集会が開催され解剖学会について二番目、臨床医学系では、第一番目となった。これを記念して百周年記念事業が行われ、近代眼科の記録を出来る限り整理し、先人の歩んで来た道を学び、これを後世に残すと言う、学会の一つの大きな目標が全七巻総頁数約二千五百頁(総重量約8kg)に及ぶ百周年記念誌の発刊であった。

日本眼科学会では既に六十年史、七十年史、八十年史、九十年史を発行し、いずれも貴重な史料となっているが、今回は四年余の歳月をかけて特に三島済一顧問の発案により従来

の記念誌を超える「日本の眼科の歴史」を編纂すると言う、馬嶋昭生編纂委員長両氏の大変な努力により各責任編集委員の下に多くの委員が参加し、日本の眼科学会の創生期から現在に及ぶ資料が発掘され、整理された。また委員の中には多くの医史学会会員が参加した。

各巻の責任編集委員は、第一巻、三島済一、内田幸男、第二巻、内田幸男、第三巻、丸尾敏夫、第四巻、渡邊郁緒、第五巻、三島済一、第六巻、石川哲、第七巻、清水弘一となっている。第一巻は明治時代の医学の発展と眼科の変遷が記述され、多くの貴重な記事や史料が三島済一によって全国から集められ、多くの新事実が発見され、膨大な資料を全て自分で入力整理した。第一巻に記載された事項の殆どは二巻・三巻の大正時代から更に昭和への発展を見る。史料は第二巻、日本の眼科の歴史・大正・昭和(第二次世界大戦終結迄)、第三巻、昭和(第二次世界大戦後)及び平成編(平成七年三月末迄)に引き継がれ記述されている。

第一巻では一章から十一章に構成され、第一及び二章明治医制と医学教育(特に眼科)の変遷、第三章及び五章医学雑誌(眼科雑誌と眼科専門地方学会の発展、第四章 日本眼科学会の発展、第六章及び七章 眼科医と国際関係国政及び医政、第八章 陸軍、海軍軍医と眼科医、第九章及び十章 眼科と公衆衛生、病院、施療、第十一章 眼科医療機器(義眼、眼鏡、点眼薬)と各章に実に詳細に記述されている。

第二巻では第一章 医学教育制度の発展から始まり、第二

章・二章及び第六章 眼科学術集会・会務記録及び渉外関係記録、第四章及び第五章 地方眼科学会及び集談会、眼科雑誌の発展の項では専門書及び明治期から発足した地方学会の流れと大正・昭和期に発足した地方集談会の発展及び眼科専門雑誌の消長までが詳細に記載されている。第七章及び第八章 眼科関連の保健衛生問題、国政及び医政が記載され、第九章 小柳美三、原田番之助、増田隆、石原忍、市川清他、の業績に名を残した人達を記述している。

第三巻は第二次世界大戦より現在迄五十年間の医学教育、眼科専門医制度、眼科関連学会の発展、国際関係、各種の賞と受賞者、眼科の社会との関わり等を記述している。

第四巻では「大学眼科の歴史」を八十大学の各大学眼科教室からの独自性が高められた提出原稿に基き、各大学眼科教室の歴史が一目瞭然に見えて来る。

第五巻では三島濟一が中心となり、明治期の眼科医の子孫が所蔵している貴重な莫大な史料発掘に基き、眼科を専門として地域医療に尽力した医師達の記録を中心に通史が展開されている。第一章には日本眼科学会創立以前に活躍した眼科医を、第二～七章には日本を六つの区域に分け、それぞれの地区で活躍した眼科医の個人史を記述、各個人は索引を含めて各県別の番号によって識別できるように記述され、明治期眼科医・人名辞書となっている。医史学史料としてこの第五巻は正に圧巻と言える。第六巻では、タイトル「日本眼科の史料」の下に目で見える史料となっている。第一章に数多くの

眼科器械の変遷を出来る限り写真を挿入し、各歴史展示委員が記述、第二章及び三章では眼科図書、講義写本、蔵書目録、図譜等史料の発展を記述。

第七巻は近代医学の事実上の出発点を一五四三年ヴェサリウスの解剖書刊行としこれ以降の「年表」が記載。年表は「日本の眼科百年史」の範囲を大きく越えてはいるが、眼科学以外の事柄を広く抜粋し、また「囲み記事」を多用し従来の、単に諸事実を記した無味乾燥な年表を出来るだけ読みやすい形で「余談」を混じえ、しかも年表の基本姿勢をくずさず、獨創性を持って通読出来る特徴をもった年表形式がとられている。

この百周年記念誌は、今後再び刊行することは恐らく不可能と言えるほど貴重な内容となり全七巻の通読により、日本の眼科の全ての歴史が展開されていると言っても過言ではない。特に第一巻の明治期、第四巻の「日本の眼科を支えた明治の人々」は、医史学の中での個人史をまた、第六巻は眼科器械史を研究する者にとって必読の書である。

(奥沢 康正)

〔日本眼科学会・〒100東京都千代田区猿樂町二一一―一四  
〇二、〇三―三二九五―二三六〇、一九九七年三月発行、A  
四判、二四七八頁、全七巻六万円（第五巻・第七巻は分冊売）〕